

『ヒロシマ・モナムール』における丸刈り

横田 理恵子

第二次世界大戦中の 1944 年、ナチスドイツの占領から解放されたフランス各地で、ドイツ兵と関わった多くの女性が人前で頭髪を刈られた。ドイツ兵と恋愛関係にあった人ばかりでなく、ドイツ人の出入りするレストラン、映画館の店主・従業員、密告者らもである。彼女らは広場に引き出され、衆目の中丸刈りにされ、さらに晒し者にされた。

1958 年制作のフランス映画『ヒロシマ・モナムール』は、占領者のドイツ兵と愛し合い丸刈りにされた過去を持つヌヴェール出身のフランス女性と、家族を原爆で失った日本人男性が主人公である。丸刈りにされた体験をもつ一人の女性という視点からこの映画を見直すと、日本人男性を前に過去が突然よみがえり取り乱す場面など、彼女の異常とも言える複雑な言動がより深く理解できるのではなかろうか。

彼女にとって丸刈りにされた過去はどのような意味を持つのであろうか。初めて愛した男性は敵国の兵士。駆け落ちしようとした待ち合わせ場所で恋人は狙撃されて女性の腕の中で絶命、その日のうちに広場に引き出され丸刈りにされる。その時彼女の心の内を満たしていたものは？見知った顔に嘲られる羞恥、屈辱、恐怖、そして何よりも絶望だったのではなかろうか。

その状態から抜け出そうとした時、行きつく先は狂気の世界となり、女性は家族によって自宅の地下室に閉じ込められる。この作品のキーワードの一つ「狂気」*folie* という言葉は、恋に溺れた自分を指すときにも使われているが、丸刈りにされて追い詰められた自分が辿り着いた先の状態をも表しているのではなかろうか。

やがて精神が回復し、女性はパリに出て女優となり、撮影で訪れた広島で出会った日本人男性と一時の恋愛をする。また彼女はしばしばゆきずりの恋もしているらしい。フランスに夫と子供がいる女性がなぜそんな事をするのか。

丸刈りにされる時、荒々しく髪をつかまれ、乱暴に鋏を入れられる。頭皮に当てられる冷たいバリカン。その感触は皮膚にいつまでも残り、彼女はそれを癒してくれる、優しく触れてくれる「手」を求めたのではないか。映画の冒頭部分をはじめ、「手」がクローズアップされる場面が何回か現れる。

また、広島で出会った二人は互いの名前も知らない。最後に相手を「ヒロシマ」、「ヌヴェール」と互いに呼び合うだけである。ドイツ兵の名は地下室で叫び続けていたというのに。過去の体験から女性は他人を愛することができないのではないだろうか。名前という最も個人的なものを明かさないとすることは、心の底からの関わりを拒むものであり、関わることに恐怖さえ覚えているのではないか。

誰かを愛したが故に罰せられる。丸刈りが彼女に残した意味を知ると、彼女の薄らぐことはあっても、決して消えることのない悲しみや苦しみも見えてくるように思う。「丸刈りにされた体験」というテーマはこの映画の中で、一見して得られる印象以上に重みをもっているのではなかろうか。

(2017.2.19)

参考文献：

Margrite Duras, *Hiroshima mon amour*, scénario et dialogue, réalisation Alain Resnais, Paris, Gallimard, 1960.

工藤庸子訳『ヒロシマ・モナムール』、河出書房新社、2014。

藤森晶子『丸刈りにされた女たちー「ドイツ兵の恋人」の戦後を辿る旅』、岩波現代全書、2016。